

---

# 怖い話

滾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

怖い話

### 【Nコード】

N7198A

### 【作者名】

滾

### 【あらすじ】

心霊スポットに興味本位で向かった青年達。しかし恐怖は”違った形”で現れて・・・。

（前書き）

どうかで聞いた話に背びれ尾びれ胸びれをべたべたくつつけたお話です。

夏になるとさ、無性に肝試しがやりたくなる。

まあ、夏Ⅱ肝試しなんてもんは単なる刷り込みで、別に暑くなつたから恐怖を求めるわけじゃない。

人間ってのは恐怖を恐れるくせに、なぜか自ら“その中”に入っていこうとする。

まあそんなわけで、俺は今年もいつもと同じように、友達数人と心霊スポットに行くことにした。

山。そのどこかにある墓場を見つけてしまうと、三日以内その人に死が訪れると言われる、イワクツキの心霊スポット。

俺達は夜を待って、その心霊スポットに行くことにした。

クネクネしている山道を車で登っていく。

しばらくして丁度いい場所を見つけて、車をそこに停める。

好奇心やら恐怖心やらで高鳴った心臓を落ち着けながら、墓場を見つめるべく俺達は山を登った。

さて、

どれくらい経つたろうか？

二時間近く歩いて、結局俺達は墓を発見できないまま、山頂に着いてしまっていた。

勿論、ここまで墓場なんて見つけていない。それどころか、樹木以外何にも見つけていなかった。

「・・・おかしいな」

俺は予定とは違った、怖くもなんとも無い展開に拍子抜けした。

「所詮は噂話だ。こんなもんだよ」

周りを見渡す俺に、友達が言っただけ肩に手を置く。

そんなもんか、と、俺は肩を落として、

「あゝ・・・、マジで期待外れだ」

ガサガサ・・・

「たよッ!!?」

言い終わる直前、

音がした。

俺達が立っている右側、草木が生い茂る場所から。

思わず俺は飛び退いて、友達の間にはスライドするように身を隠した。

「お、おい・・・、今、音・・・」

「した・・・、な・・・」

友達全員で、視線を草むらに集める。

俺達は無意識の内に体を固めて、鼓動を高鳴らせていた。  
と、

次の瞬間

「ッ!!」

突如草むらから現れるオッサン。

どこにでも居るような、少し小太りしたオッサンだ。

幽霊か!?!とも一瞬考えたが、足もあるし、第一こんなにリアルティに溢れるオッサン霊なんて怖くも無い。

「な、何だよ」

友達のその一言に、俺達の気も緩まった。

俺達はなんともいえぬ安心感に肩の力を抜き、

「マジビビッたって、マジで!」

「あはは」

笑った。気を紛らわすかのように笑った。

何かスゲエ安心した。

が、

「オイ・・・」

突然オッサンが何かを言ったので、俺らはまたびくついて身を固まらせた。

一瞬で俺達の空気を凍らせて、オッサンはこう言った。

「お前等、ここに肝試しに来たんだろう？」と。

「だったら気をつける。昔ここで殺人事件があつたんだ。知らないか？」

言つて、オッサンは首をかしげた。

俺達は顔を見合わせたが、誰もそんな話は聞いた事がない。

その空気を呼んだんだろう。オッサンはそのまま続けた。

「そんな時にちっさい女の子が殺されてなア、今でもこの辺りに出ると噂だ。もしも車に乗つてて女の子が『助けて』と言つてきても絶対に扉を開けちゃいけない。そのままあの世に連れて行かれちゃうからな」

気をつけな。オッサンはそれだけ言つと、再び暗闇の中に消えて行つてしまった。

ダッ

誰がともなく、気付いたら俺達はダッシュしていた。

ダッシュで、登ってきた坂道を逆に下っていく。

完全に、オッサンの話に吞まれてた。

友達を押しのける勢いで、何度が転びそうになりながらも何とか車まで到達した。

全員の姿は確認できる。よくある怖い話なんかみたいにな、誰かが欠けている、という事はなかった。

飛び乗るように車へ搭乗し、エンジンをつける。難なくエンジンは点いた。

ここまでで心霊的な事は起こってない。

「とつとと出せよッ！」

「解ってるよッ！」

ギュキヤキヤキヤキヤ・・・！

タイヤをスピンさせながらも、急いで山道を下る。

対向車もない。走ってる車は俺等のくらいなもんだ。

それが逆に、恐怖心をあおった。

クネクネした山道を、さっきとは逆に走って行き

瞬間、

「おい！前！」

「え！？あ　　ッ！」

キキキ

ッ

急ブレーキで車を止めた。

見えたからだ。

小さな子供が。

ライトに照らされて、

車道の真ん中に。

あれは多分、

女の子

間髪入れずに、車の外から声がする。

「助けて！」

と。

ダンッ　ダンッ　ダんだンッ

女の子が車のボディを必死で叩いている。その音と、「助けて！」という声に、俺達は半パニック状態に陥った。

これがあのオッサンが言ってた女の子の霊だ！

解った瞬間には、俺は友達に叫んでた。

「おい！おいッ！早く！早く車出せッて！」

「だから、解つてゐるッてッ！」

女の子の霊から逃げるようにして、俺達は再び車を出した。

もうそつからは殆ど覚えてない。

気付いたら家の近くまで来てて、みんなちゃんと居て、あの女の子の霊を連れてきてるような感じでもなかった。

安心して、俺達はそのまま解散した。

何事も無く日は過ぎて、

そして数日後。

俺と友達数人は、俺の家に集まっていた。

特別意味があるわけじゃない。単純に、遊ぶために皆を呼んでいた。

『道路では渋滞が続き』

テレビからは聞き手の居ないニュースが垂れ流しになっている。

誰もそれに耳を傾けてることなくニュースは進んだが、

『次のニュースです。山で殺人事件が』

このニュースが流れた瞬間、全員の視線がテレビに向いた。

「お、おい、この山って、俺等が行ったトコだよな・・・？」

「そうだ、あの山だよ」

「あ、じゃあこの殺人事件って、あのオッサンが言ってた・・・？」

「え・・・、でもおかしくないか？日付が・・・」

オッサンは事件が起きたのは“昔”と言っていたが、ニュースが告



げる日付では、事件が起こったのは最近のこと。

それも、この日付は・・・。

「これって・・・、俺等が山に行った日じゃねえ・・・？」

そう、その殺人が起きた日というのは、俺達がああ山に行った日。

ニユースは告げる。

『容疑者の 被告は、深夜に殺して、そのまま埋めたと供述  
しているとの事で 』  
と。

「おい・・・」

俺達の間、嫌な予感がよぎった。

『被害者の ちゃん五歳の女の子で 』

アナウンサーが告げると同時に、その女の子の画像がディスプレイに表示された。

瞬間、

「ッ」

俺達は凍りついた。

その子こそ、俺達が車に乗っていたとき、駆け寄って助けを求めた女の子だった。

「マジかよ・・・」

ニユースが告げる死亡推定時刻からすると、あの時の彼女は幽霊何かではなく、実在する、助けを求める少女だったらしい。

「じゃあ、あの俺等が助けてりゃ・・・」

俺達は今までにない後悔に身を打たれて頂垂れた。  
しかし、

さらに恐怖に陥るのは、これから

『これが、 被告の顔写真です』

アナウンサーが告げる。

俺達はそれを見た瞬間、背筋が凍った。

ディスプレイに表示された犯人。それは、

あの、山で見たオッサンだったんだ。

（後書き）

これの怖いところが解らない人もいるかと思います。そんな人は、もう一度よく考えてください。

何が怖いのか解った瞬間、「アハ体験」と共に背筋が凍ること間違いないし！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7198a/>

---

怖い話

2010年10月28日03時27分発行